

神戸大学農学部

朝鮮人強制連行跡を調査

—兵庫県加西市・鶴野飛行場跡—

飛田 雄一

七月二日、私は二十年前に母校神戸大学農学部の実験農場を訪ねた。七月九日に結成された兵庫県朝鮮人強制連行真相調査団の鶴野飛行場跡の現地調査に参加させてもらったのである。一九六九年、神戸大学農学部園芸農学部に入學し、教養部で少し寄り道をし、三年目に学部へ上がると、毎週一回の農場実習があった。当時は中国自動車道もなく、神戸大学から農場のある加西市まで、専用バスで二、三時間かかって農場に行き、田植、稲刈り、乳搾り、葡萄の剪定、牧草刈り、大根ぬきなどなど、毎週一回のバラエティーに富んだ実習は、楽しいものだった。田植も午前中は手で植え、午後は機械でという具合に、稲刈りも手刈り、小型稲刈機と大型コンバインという具合で、なかなかたぬになる実習であった。

#

数年前に兵庫県朝鮮関係研究会や姫路朝鮮問題研究会が鶴野飛行場関係の地下工場等を調査し、その成果の一部が『地下工場と朝鮮人強制連行』（明石書店）にも発表されているのは知っていた。しかし、直接現地を訪ねる機会もなくそのままやりすごしていたのであった。ここに約一五〇〇人の朝鮮人が川西航空

機の離発着場および海軍鶴野飛行場で労働を強いられていたのである。

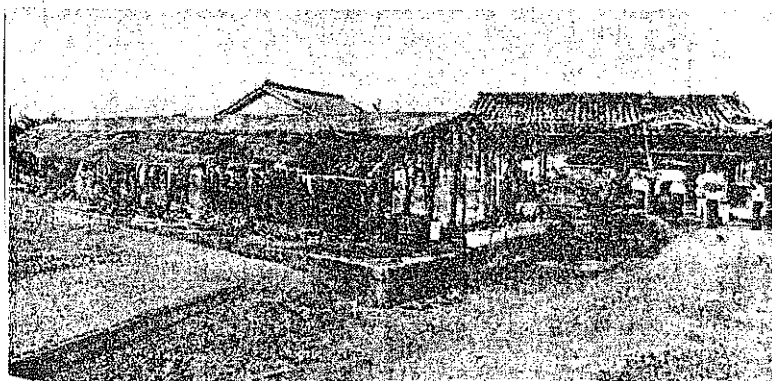
兵庫県の真相調査団の結成式で鶴野飛行場についての予備調査の話として、神戸大学の農場の一部に砲台の跡が残っているという話もうかがった。これは是非参加せねばと思いい後輩にあたる農学部の大学院生二人とともに調査に参加した。当日、十時に加西市役所に集合し、打ち合せのちマイクロバスに乗って鶴野飛行場関係の施設を回った。まず、市役所を南下して機関砲座跡へ行った。田んぼのはずれに直徑五メートルの穴があいており、周りは頑丈なセメントで固められている。当時、鶴野飛行場があった関係で農村的なこの地方にも「グラマン」などがよく空襲にやっきたというが、それを打ち落とすためにこの機関砲（高射砲）がこの穴の真ん中に置かれていたという。地下には弾薬庫もあるというが、埋まっていることはできなかった。また、バスに乗り込んで四、五分も行くと鶴野飛行場の滑走路の跡だ。当時、海軍施設航空隊の練習機が離発着していたというが、現在、飛行場として使われておらず自衛隊が管理している。道路として使用されているのでもなく、車でここに迷いこむと、夜など出口が分から

なくなってしまうという。滑走路は五五〇尺のもので工事前は、かなりの起伏のあった地域だというが、いまはまさに無用の長物のためにヘリコプターを飛ばし、夕方ニュースでその映像を見たが、航空映像で見ると農地のなかに異様な滑走路の跡が残っている様子がよくわかる（ビデオをとりましたので必要の方はどうぞ）。セメント舗装がされているが、よくみると敷設近くの工事だったからか完璧なものではない。また附近には格納庫のよう

平成3年(1991年)7月9日

火曜日

国民の歴史に「真実」を伝える航空写真—いざいしむ加西市加西町



な半地下の施設も残っている。また、少しバスに乗ると民家の前に大きな防空壕がある。あまりにも頑固にできているので壊すに壊せない代物だが、当時弾薬庫として使用されていたのではないかと推察されている。今は、写真のように露出しているが、当時はまさに壕として土に埋もれていたらしい。

#

つぎに訪れたのが神戸大学の実験農場。本当に久しぶりだ。案内をしてもらって農場を少し入っていったところは、かつて、翌年の収穫のこともあまりかんがえずにチヨキンチヨキンと葡萄の剪定実習をした畑のすぐ前だ。ここに高射砲跡がある。先の高射砲跡と実験農場の高射砲跡とは滑走路をはさんで反対側にあり、爆撃に対抗するための要所だったのだらう。農場の高射砲跡は大きさは先の高射砲跡と同じくらいだが、地下の弾薬庫(?)が埋つてなくて入れるという。長蛇行の私はさっそく入ってみた。高射砲が直径五メートルほどのものでそう大きな地下倉庫ではないが、コンクリートがすごい。できたてのように生々しく、少々の爆撃では破壊されないような強固さである。

真相調査団の洪祥進さんから、農場内には高射砲の他にも弾薬庫などの壕が残っているという説明があったが、前日話をうかがった保田茂さん(神戸大学農学部助教授、学生センターの監事)も、防空壕跡のようなものは他にもいくつあつて、それを利用してキノコの研究をした先生もいたという。学生時

代、私も高射砲跡は知らなかったが、実習のとき壕跡のようなものを見たことがあるような気がする。

#

その後、朝鮮人労働者のひとつに案内してもらってから農業環境改善センターに場所を移し、当時を知る朝鮮人と日本人からそれぞれお話をうかがった。おひとりは一九二〇年生まれの鄭熙武さん。鄭さんは二〇歳の時に募集で長崎の成蹊に来てから五ヵ月後に逃亡し、関東を転々としてから鶴野飛行場建設工事に約三年間かかわられた。トロッコ押しのようなきつい仕事はほとんど朝鮮人がしていたことなどをうかがった。

もうおひとりは、一九三二年生まれの友井公一さんで、兵庫県加東郡社町の町会議員(社会党)をされている。昭和池工事で犠牲となった朝鮮人の名が刻まれた慰霊塔を発見された方で、この七月二七・二八日西宮市で開かれる「第二回朝鮮人・中国人強制連行・強制労働を考える全国交流会」で、それについて分科会報告もされる。鶴野飛行場建設当時、現場に行っていた人が多く、当時のことを知っているのは、徴兵に取られない一四歳以下か四〇歳以上の人に限られるという。当時四〇歳以上の人は現在では亡くなられた方が多いという。友井公一さんは、父が区長で三〇〇人の朝鮮人の労働の世話をしていた関係で朝鮮人につきあいがあつたこと、土砂を満載したトロッコは怖くて近寄れなかったけれど空のトロッコを押して遊んだことがあ

ること、戦後高射砲台下の倉庫に海軍が隠していたパンや乾糧はまぐりなどがあり盗ったことがあることなどを証言した。

#

今回の調査で特に注目されたのは、全国で三例目の「朝鮮人寄留簿」が見つかったことである。予備調査の時に九会が三村松岡関係の資料の中から発見されたもので、一九四三年三月二十九日から四六年六月二十六日までの一九九世帯、五五五名の、年齢、性別、前寄留地、寄留日が記されており、また同時に、四三年、四四年の朝鮮人の除籍簿も発見されている。そこには九世帯が豊前市に転居したことなどが書かれているという。「という」というのは、加西市当局がその戸籍簿および除籍簿を公開してないからだ。真相調査団はその公開を要求しているが、加西市は、戸籍簿等は現在の住民票に相当するもので「プライバシー」の問題があるので、全面公開できず、あらたにワープロで打ちなおしたものを貸し出すという。プライバシーをまさに隠して強制連行された朝鮮人の戸籍簿の公開要求に対して、プライバシーを理由に拒否するとは腹立たしい限りである。

昨年、今年と朝鮮人の強制連行現場をいくつか訪ねたが、母校の農場にその「跡」を訪ね、学生時代の自分を振り返ってみて、このような事実を全く知らなかったという恥かしさを覚えるとともに、まさに足元の歴史を知ることの大切さを改めて感じた今回の調査であった。